

<食品に関するリスクコミュニケーション（大阪）へのコメント>

コーディネーター：中村 雅美

- ① 食品の安全性に関する意見を交わす機会としてこうした場は適切だと思う。コミュニケーションの基本の一つには、一般人の不安の理由や背景をくみ上げ、それを解消する手だてを探ることにあると考えるからだ。ただ、いつもいわれることだが一般人、消費者の参加が少ない。周知よりも理解を徹底するならなおさらである。開催時間がタイトであろうが、今後工夫を要する課題であろう。
- ② 佐藤洋・座長の講演は全体としてわかりやすかった。ただ、難しい用語（例えば「不確実係数」など）がいくつかあり、ここで思考が停止することもある。用語集が配布されているからこれを参考にすればよいのだが、参加者は実際はなかなかそこまで気が回らない。講演の中で「この語は用語集に出ている」と言って頂ければよかったかもしれないし、パワーポイントの画面上にその旨記述があった方がよかったかもしれない。（アンケートでも「専門家による講演がわかりにくかった」という回答が30%、「配付資料がわかりにくかった」という回答が27%あった）
- ③ 今回のメチル水銀摂取基準が出てきた背景がつかめたのではないかと（例えば一般人ではなく胎児を対象にしたものであること、水俣病のようなものにつながる量ではなくもっと低い量を対象にしていることなど）。ただ、魚だけではなくトータルのメチル水銀の摂取を対象にしていることをもう少しきちんと伝えてもよかったのではないかと。
- ④ 影響評価だけを行うのではなく、今後、関連官庁の対応を委員会としてもウォッチする必要がある。例えば、魚種による違いや内臓における分布など。
- ⑤ 評価して、基準を決めるのに海外のデータに頼るのでは不安は残ると指摘が会場からもあった。費用や時間とのかねあいもあるが、こうしたデータの必要性を関係官庁に伝えて早急に関連プロジェクトの実施につなげる努力も必要ではないかと。
- ⑥ 評価や基準作りのねらいなどを正確に確実に伝えるためには、必要な情報をきめ細かくきちんと伝えることが肝要。この点、メディアの役割は益々重要になっているが、メディアはえてしてセンセーショナルリズムになりがちである（メチル水銀－妊婦・胎児－魚となればその傾向は顕著に現れることが予想された）。ただ、メディアも最近では基準や影響評価が出された意味や背景をきちんと伝えるようになってきており、その懸念は小さくなっている。とはいえ、伝え方を工夫することは是非必要。
- ⑦ （アンケート結果・問2に関する・を見て）パネルディスカッションの進め方に関して「あまり適切ではない」という回答が12%ほどありました。これは参加者のこういった層（例えば一般消費者）なのかがわかれば、今後、リスコミの場の運営の参考になるのではないかと。

以上です。